

にじいろの なかまたち 2023

児童養護施設とファミリーホームの交流ワークショップの記録





01

プロジェクトについて

5年間の軌跡

この企画は、2019年度に文化庁「障害者等による文化芸術活動推進事業」の採択を受けて始まりました。2019～2021年度の3年間は2つの児童養護施設、2022～2023年度の2年間は児童養護施設とファミリーホームとの交流ワークショップを行いました。様々な施設の子どもたちや施設退所者が、ダンスや音楽、美術などの表現活動を通して交流してきた5年間。この冊子は、時間や場を共に過ごした「にじいろのなかまたち」の、2023年度の活動記録です。

参加施設

児童養護施設 カルテット(さいたま市) / 二葉むさしが丘学園(小平市) ほか

1年目 2019

- [ワークショップ] 計9回。地域の公民館や市民会館に出かけながら交流。
- [発表] 最後の2回は、各施設で職員や関係者に向けて発表会を開催。
- [記録] CD付きドキュメント・ブック発行。



ドキュメント・ブック

2年目 2020

- [ワークショップ] 計7回。新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、オンラインで交流。
- [発表] 最終回に録画して、後日職員などに公開。
- [記録] 施設職員やアーティストの座談会を行いWEBコラムを公開。



WEBコラム

3年目 2021

- [ワークショップ] 計11回。オンラインを併用しながら一部対面で交流。
- [発表] 最終回に録画。ホームページにて公開。
- [記録] 写真を中心にした記録冊子を発行。



記録冊子

参加施設

児童養護施設 二葉むさしが丘学園(小平市) / ファミリーホームしろやま ほか

4年目 2022

- [ワークショップ] 計9回。一部オンラインで実施。
- [発表] 施設内で職員や関係者に向けて発表会を開催。
- [記録] ワークショップのレポートと施設職員のエッセイをWEBコラムで公開。



WEBコラム

5年目 2023

- [ワークショップ] 計7回。施設内(一部公共ホール)で対面で交流。
- [発表] 地域の公共ホールで職員や関係者に向けた発表会とトークセッションを開催。
- [記録] 5年間の記録冊子を発行。

※ワークショップの回数には発表を含む。

ワークショップ・レポート

2023年度は、児童養護施設 二葉むさしが丘学園（小平市）と、ファミリーホームしるやまで暮らす子どもたちに加えて、地域で暮らす児童養護施設退所者、グループホームで暮らす障害のある方が、ダンスや音楽、美術など様々な表現活動を通して交流してきました。12月の最終回には、地域の公共ホール「ルネ小平」に出かけて『にじいろの森 2023』と題した発表会とトークセッションを開催しました。ワークショップの様子をレポートします。

- 参加者 ● 児童養護施設 二葉むさしが丘学園（小平市）小学1年生～高校3年生 10人
● ファミリーホームしるやま 小学2年生～19歳 6人
● 地域で暮らす児童養護施設退所者 2人、障害者グループホーム利用者 1人
- アーティスト ● セレノグラフィカ（隅地菜歩・阿比留修一 / ダンスカンパニー）
● はしむかいゆうき（音楽家）、水内貴英（美術家）
- ゲスト ● 新井英夫（体奏家・ダンスアーティスト）、坂板記代子（身体表現家）
● アーティスト
- 実施期間 ● 2023年6月～2023年12月 計7回実施
- 実施会場 ● 二葉むさしが丘学園 体育館、ルネ小平 レセプションホール
- 主催 ● 文化庁委託事業「令和5年度障害者等による文化芸術活動推進事業」
● 文化庁、特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

ダンス

ワークショップの冒頭に、ヨガのポーズを一つずつやってみながら呼吸を整えて身体をほぐしました。みんなで輪になって隣の人に動きを伝えていくゲームのようなワークや、水の中をイメージして速さや動きに変化をつけているような泳ぎ方を考えて移動してみるワーク、誰かと一緒に踊ることを楽しむフォークダンスのようなダンスも取り入れました。アーティストのダンスを見てもらった時には、普段テレビなどで見かけるダンスとは違う動きを面白そうに眺めていました。美術が完成した後は、木を動かしたり、木に隠れたりそこから登場したり、木があることで動きのバリエーションが豊かになりました。



音楽

最初は、アーティストが不思議な音のする笛を演奏して、大きさによる音の違いに耳を澄ませたり、タイコのリズムを感じたりすることから始めました。また、鉄琴のような楽器やシェーカーなど小物楽器を使って、その音に合わせて動くワークや、木に取り付けた木の実のようなシェーカーを使った音あそびの工夫などを考えました。そして、ギターやウクレレを演奏する子たちと職員さんと一緒にバンドをつくり、歌が好きな子がボーカルを担って一曲練習する時間も設けました。オリジナルの楽曲『むさしるやまの探検隊』は、振付もつくって歌も踊りも楽しみました。



美術

「自分の木」をテーマに、大きな板段ボールに思い思いの自分だけの木の形を描いて、絵具やマジック、折り紙や布など、様々な素材で飾りました。折り紙でたくさん花をつかって貼り付ける子、昆虫が好きでカマキリやクワガタをつかって貼り付ける子、リンゴのなる木や、お菓子がなる木など、一人ひとりがそれぞれのアイデアで、色も形も大きさも様々な木が出来上がりました。



発表 『にじいろの森 2023』

2023年度の最終回は、ルネ小平のレセプションホールに出かけて発表会を開催しました。ワークショップで取り組んできたワークや楽曲、自分たちでつくった「マイツリー」を舞台美術として活用したシーンなどを構成して『にじいろの森 2023』と題した作品になりました。観客を交えてみんなで一緒に踊る場面や、終演後のトークセッションでは子どもたちや観客の感想を伝え合うフィードバックの時間を設けて、あたたかく和やかな時間となりました。



発表会の翌日、3人の子どもたちに、インタビューを行いました。セレノグラフィカの隅地さん(まほ)・阿比留さん(あび)、事務局スタッフの中西とお茶を飲みながら、これまでのワークショップを振り返って印象に残ったことや、ダンスや音楽に関する想いなどを聞いてみました。

〇さん

2022年度から2年間参加の
中学3年生(二葉むさしが丘学園)



■初めてワークショップに参加した時のことについて

〇さん：初めて会った時は本当にびっくりした。「何この人たち!? 何踊ってんのかなあ? 何やってんだらう?」って。最初は怖かった。それで、やってるうちにだんだん「面白い人」だなあって。多分小さい子たちも最初はびっくりすると思う。

中西：今は?

〇さん：今は、もう素晴らしいダンサーだと思う。

まほ&あび：わお。

〇さん：私の中で作品みたいに見える。絵が好きなんですけど、そういう作品を見てみたい感じ。

まほ：どういうタッチの絵が好き?

〇さん：私が好きなのはゴッホとか。一番好きなのは岡本太郎さん。

まほ：私も岡本太郎さんは大好き。(大阪にある)「太陽の塔」の中に入りにおいでよ。

■美術とダンスについて

〇さん：ダンスは結構好き。ダンスと絵って共通点が一個あると思う。2つとも表現の仕方が違ったりするので。ダンスはダンスで表現がいろいろあるし、絵は絵で色の使い方とか表し方とか全然違うから、その共通点がいいのかなと思う。個性がある。「マイツリー」もみんな違うじゃないですか。虫を描いている子もいれば、Mさんみたいに木にお菓子を付けた子もいる。みんな違う。

まほ：〇さんのダンスの印象は、好奇心がいっぱい詰まっているという感じ。私たちが「こんな感じ」と言っても、それをそのままじゃなくて必ず〇さんが身体でやってくれることは、ちゃんと〇さんテイストになっているというのが、いつもすごく見るのが楽しみでした。

〇さん：共通もいけど、共通は共通でなんか淋しいから、そこに一個加えるだけでだいぶ違うから。結構それはある。

まほ：意図的にね。

〇さん：美術とは関係ないけれど、スポーツとかは勝ち負けがあるじゃないですか。私は、最初は勝ち負けが大事だと思ってたんですよ。でも実は本当は違っていたことに気づいた。勝ち負けじゃなくて、楽しむことが一番大事だなと思うようになった。最近はスポーツでも、負けても楽しかったら良いかなと思う。悔しい気持ちはあるけれど、楽しいのが一番大事だから。

Hさん

2019年度から5年間参加の
小学6年生(二葉むさしが丘学園)



Tさん

2023年度の途中から参加した
中学3年生(ファミリーホームしるやま)

■ワークショップに参加したきっかけ

Hさん：なんかおすすりめされたから。Aさんもやってるって聞いたから「じゃあ、やってみようかな」と。

中西：Hさんはすごくお休みが少ないよね。

まほ：オンラインの時もHさんはいつもいてくれた記憶がある。何でもちゃんと取り組んでくれる印象がある。

あび：くるのが早い。一番乗りくらい。

まほ：そうそう、早く来てくれた。

■5年間の思い出や、発表について

Hさん：思い出に残ったことかあ。カルテットに行って発表した時かな。

中西：みんな車で来たんだっけ? 車で何してた?

Hさん：1回だけ別の用事があって一人で行ったときは、他の職員とおしゃべりしてた。

中西：昨日の発表会はいかがでしたか?

Hさん：リラックスしてできた。でも緊張はしてた。

中西：Hさんは大事な役を任されてたね。

あび：任せるとなるとHさんの名前が出てくる。ずっと一緒にやってくれて、雰囲気もわかってくれてる。嫌と言わずに「いいよ」と言ってくれるのはすごく支えだった。

Hさん：今日(のインタビュー)、本当は緊張するからやめようかなと思ってたけど、鈴木さん(職員)に電話で言われたから「やります」って言った。

あび：えらい。やってみたら、意外と楽しかったなあとか、やってよかったなと思うこともある。やってみないとわからないから、Hさんのそういうところが良いなあと思う。それはワークショップでも生きてたよね。

■ワークショップで不安だったことと、人との関わり

Tさん：緊張は、正直あんまりなくて、それよりも周りの子と馴染めるかなとか、話せるかなというコミュニケーションの方の不安が大きくて、そっちを気にしてたので、発表ではあまり緊張とかなかったですね。でも来年も一応参加したいなと思っているので、その時は発表に良い意味で緊張を持ちたいなと思っている。

あび：人とどういふうに関わるのか、おしゃべりできるかな、というのは確かに不安ですよな。

まほ：心配にはなりますよね。初めて自分がそこに入っていくということになったら。

Tさん：でも、ただ会話するだけなら確かに不安なんですけど、一緒に何かつくとか、音楽するとかだったらスッと馴染みやすいので、そういう形でみんなと関わられたのは良かったな、と思っています。

■これからワークショップでやってみたいこと

Tさん：まずは回数を重ねたい。まだどういうことしているのか大まかなことしかイメージできてないので、来年もっと参加して「芸術家と子どもたち」はこういうのなんだ、というのを自分なりに感じていきたいなと思っています。何をやりたいかはそこからですね。

あび：おお。

中西：毎月一回くらいのペースで通えたらと思っている。今はとにかくいろいろやってみたい気持ち?

Tさん：そうですね。今はこだわりは特にはない。

中西：来年は高校生? 忙しくなるかな。

Tさん：高校生です。今は受験に向けて。でも、ワークショップで上手くいったらモチベーションにもなるから、どんどん参加したいと思う。

中西：本当はこのプロジェクトで、最終的には(セレノさんの住む)京都に遊びに行きたかったのよ。

04

職員の声

「また逢えるよね」のお別れ

二葉むさしが丘学園
自立支援コーディネーター 鈴木章浩

【応答性、共感性・他者の存在】

施設に入所してくる子どもたちは、自身の人生そのものが「否定」から始まっていることが多くあります。見えないうちに覆われている子どもたちです。そのような凄惨な人生を送ることを余儀なくされてきた子どもたちは、他者へ向けた伝達方法、表現方法などを身に付ける機会を奪われてきたと言えます。本来であれば、出生前後から育まれるべき「愛着関係」が育まれることなく生きてきた子どもたちは、真の意味での他者との信頼関係を築くことが不得手です。人間の成長過程で重要な「応答性」「共感性」を体験することは、「他者の存在」があって初めて可能になります。一時保護される際、保護者との分離・生活していた地域との分離・友人や教職員との別離などを否応なしに経験します。施設入所後も担当職員の退職にともなう別離など、本人にとって理不尽に思える分離、別離を幾度となく強いられてきています。

【芸術のプロフェッショナル】

アーティストたちは、子どもの自信のない意思表示に対し、優しく応答し、共感を示してくれます。それを繰り返して積み重ねていくことで、少しずつ、本当に少しずつ子どもたちの気持ちが溶解していく様子が窺えます。安心・安全の保障があった上で、子どもたちは慎重に自分らしさを表現し始めます。アーティストたちは、ひとりの大人として優しく子どもたちに接し、「遠くにおいて、たまに会う親戚のおばちゃん(おじちゃん)のように思ってほしい」と仰ってくれています。この5年間を振り返ると、「コロナ禍」という想定外の環境で、対面形式での実施を許さない時期がありました。オンライン形式で試行錯誤を繰り返し、思い通りにいかず、悩ましくもありました。しかし、アーティストのパフォーマンスは、環境に負けません。子どもたちは、大人の本気に魅せられてしまいます。

子どもたちは出逢いを積み重ねていくうちに、アーティストや「芸術家と子どもたち」のスタッフに、余所行きではない表情を見せ始めます。「この人たちは、自分たち(の表現)を否定しない大人たち」「時折、逢いに来てくれて、自分たちを褒めてくれる。ただそれだけではなく、得意分野で大人の本気を見せてくれたり、聴かせてくれたりする。その時は、優しい大人から、カッコいい大人に変身する。それは、とても心地よだけでなく、自分もカッコいい大人になりたいと前を向くことができる時間や空間である」と子どもたちは、無意識に認識しているのだろうと私は考えます。

【心地よい言葉と心地よい別離】

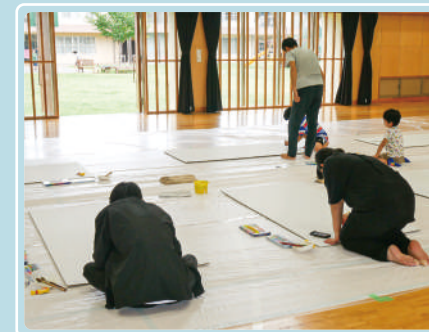
不条理な分離や別離を何度も経験してきた子どもたちが「何をやっているのだろうか?」「何だ、この大人たちは?」と感じて始まったワークショップで創り出された『作品』は、「一生の宝物」と子どもたちは言い、「発表だけでなく、芸術家の人たちとの出逢いにありがとう」とも言っています。芸術のスペシャリストは、子どもたちに「そこにいてくれるだけで十分」と優しく語ってくれます。子どもたちは、「また逢えるよね」という思いが通じている、初めての心地よい、安心した別離を経験できたのではないのでしょうか。

【改正児童福祉法と子どもの意見表明権】

子ども家庭福祉と芸術との協働における効果を発信することに、追い風が吹きました。2016年の改正児童福祉法は、子どもの能動的権利の尊重について明文化されています。福祉を受ける「権利の主体」へと子どもの位置づけが変わりました。また「子どもの意見表明権」がクローズアップされています。しかし、意見を表明する以前に、意思を形成する支援が不可欠です。私たちには、そこに視点を向けた実践が求められているのだろうと考えます。



ギターを持って一緒に身体を動かす鈴木さん



体育館を広く使って実施した美術の回



二葉むさしが丘学園
自立支援コーディネーター
鈴木章浩

©金子愛帆

05

アーティストの 声

いっしか親戚の集まりのように

セレノグラフィカ 隅地茉歩

「ワークショップって何ですか？」

これは『にじいろの森 2023』の終演後、出演者の一人が誰に向けてともなく発した質問で、まだ会場に残っていた観客の中からはなぜか温かい笑いが起きた。出演した感想を、みんなが順番に発言していく機会の一コマである。彼自身のその時の高揚感をもたらした仕組みについて、それがワークショップと名付けられているものなのかどうか、その確認をしたかったのだと直感した。真っ直ぐで明るい声で放たれたこの深い問いに対して、果たして何と答えれば良いのだろうか。

施設間交流ワークショップという趣旨で、5年間にわたって進められてきたこの事業は、施設と施設の、子どもたちと大人たちの、アーティストとスタッフの、施設の職員さんと外部者の、そして音楽とダンスの、舞台演出と舞台美術の、等々、たくさんの二者の協働の時間の重なりであった。5年目に当たる今年度は、2023年6月の初回ワークショップから、最終回となる12月の発表会

本番まで、夏も秋も冬も、毎回20人前後が二葉むさしが丘学園の体育館に集まって過ごし、やがて近況を尋ね合う短い会話があちこちで生まれるようになった。そんな何気ないやり取りから、その日のワークショップは始まる。あえて達成目標を収束させず、できる限り緩やかな幅を用意しておく。窮屈にならないこと、それが大事だと誰もが感じているからだ。歌いつつ誰かの歌声を聞き、身体を動かしつつ誰かの身体の動きを感じ、その日その場に臨むまで具体的には予想していなかったことに参加者がトライする中で生まれる予想外のこと、それがワークショップの中身を成すのだと信じている。

この事業では、ワークショップの開始前にも終了後にも、スタッフやナビゲーターや職員さんや参加者含めた多世代が、三々五々思い思いに言葉を交わし、笑顔になったり真顔になったりしていた。まるで「親戚の集まり」のようだ、と何度も感じたものだ。これはワークショップと呼ばれるものが持っていて欲しいものの一つ、「居場所

の空気感」である。その人の居場所については、誰も押し付けたりせず、誰も奪ったりしない。その、どこか安心できる居心地の中で、参加者は少しずつ自分を誰かに開示していくようになるのだろう。

自分がどんな時に心地よくいられるのか、そのことに繊細な人たちは、いわゆる、ノリよく何かをすることに対して必ずしも素早く反応するとは限らない。同時に、繊細であるがゆえに場への思いやりがあり過ぎて、自らノリを加速して反応してくれることもある。その場にいると、その不揃いな空気の波が、何層にも重なっているのを感じる。そして、「ひとりとして同じ子がいない」という、当たり前のことを再認識するに至る。一括りにすることは何かを都合よく運んでくれるが、ワークショップは、すんなり運びすぎないことの方にこそ意味があるように思う。

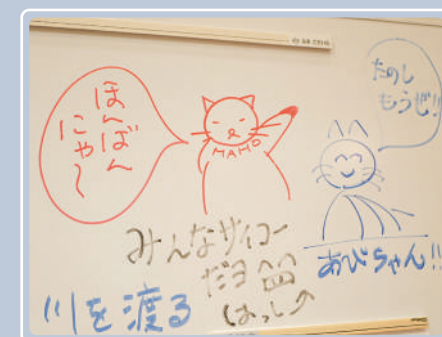
発表公演の翌日、参加してくれた子どもたちのうち三人がインタビューに答えてくれた。このプロジェクトに参加してくれた期間も学年も違う三人である。どの子の言葉も瑞々しく、同じ場で同じことに取り組んでくれた中での掬い取り方の違いに、改めて目を開かせられ、頼もしさを抱かずにはいられなかった。子どもたちに、私たち大人の方が成長させてもらえることも、ワークショップでは往々にして起こるのだ。

さらに、ワークショップとは、開催されている時間と期間で終わってしまうものなのだろうか。もしかすると、その場にいた全員の中で、進化も深化もし続けていくのではないだろうか。細やかな発見や共感を積み重ねたことは、お互いが離れてからも熟成されて味を変えていくように思えてならない。これは、事業の終了に伴う一旦のお別れの訪れを経て、初めてもたらされた感覚である。この5年間に起きた全てを愛おしみ、このプロジェクトに関わられた幸運をこれからも胸に刻んでおきたい。どうかこの、どこか不思議な「親戚の集まり」一同に、これからも恵みが降り注ぎますように。

最後に、このプロジェクトに関わってくださった全ての皆さんに、心から感謝申し上げます。



2人組、4人組など、いろんな相手と踊るワーク



ホワイトボードにはいつもアーティストからのメッセージ



セレノグラフィカ 隅地茉歩

セレノグラフィカ（隅地茉歩と阿比留修一）は、関西を拠点に幅広く活動を展開するダンスカンパニー。不思議で愉快な作風と緻密な身体操作が持ち味。全国を駆け巡りながら「身体と心に届くダンス」を伝え続けている。

<http://www.selenographica.net/>

©金子愛梨



NPO 法人芸術家と子どもたち

〒170-0011 東京都豊島区池袋本町4-36-1 旧文成小学校2階

TEL : 03-5906-5705 FAX : 03-5906-5706

mail : mail@children-art.net


HP : <https://www.children-art.net/>

発行日 : 令和6年3月1日

発行者 : 特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

編集・デザイン : 緒方彩乃

※無断転載・複製を禁ず。



私たちの活動に賛同し、協賛・助成・寄付といった形で支援していただける企業・財団・個人の方をお待ちしています。ご関心をお持ちの方は、ぜひ事務局までお問い合わせください。